
目が覚めたら世界が終わってた

flat_flater

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目が覚めたら世界が終わってた

【Nコード】

N4343Z

【作者名】

flat | flater

【あらすじ】

突如学校に現れた謎のモンスター相手に死闘を繰り広げ、仲間と共に命からがら生き延びた女子高生。

とかだったら少しは格好が良かったものの、私が目覚めたときには既に世界が終わってた。これは自称魔法使いの恋咲凜音こいさきりんねが、ならず者や巨大モンスターの闊歩する町でひっそりと生きていく話**

*ちよくちよく改訂していくので注意***

EP1：目が覚めたら世界が終わってた（前書き）

阿鼻叫喚のモンスターパニックと超能力バトルを合わせた感じの小説を書きたかった。

EP1：目が覚めたら世界が終わってた

突如学校に現れた謎のモンスター相手に死闘を繰り広げ、仲間と共に命からがら生き延びた女子高生。

とかだったら少しは格好がついたものの、私が目覚めたときには既に世界が終わってた。

*

私の名前は恋咲凜音^{こいさきりんね}。聖歌学園に通う3年生だ。

ちなみに聖歌学園なんて少し恥ずかしい学校名をしているが、特にこれといって特徴の無い普通の学校だ。

が、それじゃ私がつまらないので、生徒会長になってから「ごきげんよう週間」を作ったことがある。

生徒会役員（女の子）を校門に立たせて、登校してきた生徒に向かって「ごきげんよう」と挨拶をさせるのだ。

教員連中が少し難色を示したが、校風の革命云々それっぽいことをつらつら話したら、短期間ならという条件付で許可をもらった。勿論ただの私の趣味だが。

恥ずかしそうに頬を染め「ご、ごきげんよう……」と挨拶をする女の子を見て、一部の男子生徒は涙を浮かべ、更には遅刻常習犯の生徒数名がその週だけは異様に早く登校してきたりと、なんだか思わぬ副次効果があったりもした。

勿論、一番喜んでいたのは私だが。

つと話が逸れた。

取り敢えずは私の位置情報の確認だ。まあ、これはGPSを使ってもない。

朝、起きてからずっと家に閉じこもっているから。

私が住んでいるのはアースクエイク桐ヶ谷という学園と駅の丁度中間くらいに位置する小綺麗なマンションの4階の4号室(404号室)だ。ドキッとするような名前のマンションだが、耐震性はしっかりしているらしい。

妙にダルイ身体を起こして、入学時に買った黒い目覚まし時計を見てみると、短い針が11と12の間くらいを指してた。

一瞬焦ったけど、どうせ遅刻なら盛大に遅刻してやれと思い直し、インスタントのレモンティーを作ってベランダの扉を開け、カップに口をつけながらいつもの外の景色を眺めた。

晴れ渡る空の下、人が走ってた。

というか絶叫してた。

見える範囲の道路は車で埋め尽くされ、所々で事故が起こってた。

んで、人々の絶叫と車のクラクションをBGMにして、

なんか　でっかい鳥みたいなのがいつぱい走ってた。

これが30分くらい前。

で、まあ、ここまではいい。

いや、だいぶ良くないけど、取り敢えずはいい。問題はその後だ。

私は驚いた。なんたって、目が覚めたら外が凄いことになってるんだよ？ いつも冷静を気取ってる私でも流石に少しは驚く。んで、驚いた拍子に手に持っていたカップをベランダの外に落としちゃったわけだ。

勿論、カップは重力に反することなく落ちていくよね？ 具体的には重力と空気抵抗が釣り合った感じで。ほんの数分前まで、私もそう思ってた。

カップを落とした私は焦ったさ。雑貨屋で2000円も叩いて買った、黒猫柄のおしゃれなやつで、私が今一番気に入っているカップだったから。

私はベランダから身を乗り出して落ち行くカップに向かって手を伸ばし、そして叫んだ。

「逝くなーッ！」

私は自分の物は大切にするから、小さなものでも一つ一つがもの凄く大事なわけだ。

しかし、流石の私でも物理法則に抗あらがうには10年ほど早かった。

カップはシャンツ！ と音をたてて、地面に吸い込まれた。私は泣いた。

泣いて、泣いて、涙にぼやける両目で、遠くに見える黒猫カップの亡骸をぼんやりと眺めてた。

その時だ、壊れたカップが、まるで天に召されるかのように宙に浮き、私の前まで飛び上がってきた。

最初は夢かと思った。私の淡い幻想が起こした幻かとも。でも、違った。

それは物理法則を一切無視するかのごとく、宙に浮いたまま動かな

い。

レモンティーの雫を纏った細やかな破片が、太陽の光を反射してキラキラと光る様子には私は目を奪われた。

しかしそれだけじゃあ、あんまり面白くない。もっとこう、ぐるぐると回る銀河みたいな感じで。

と、思ってたたら、カップの破片たちがなんかこう、銀河がぐるぐる回る感じで回転しだした。

マジで？ と思って、こんどは止まれつと念じてみた。瞬間、空をぐるぐると回っていたカップの破片たちがピタリと静止した。

10年なんてもんじゃなかった。

どうやら私には物理法則を凌駕する力があるらしい。

*

と、というのが今までの出来事の一連の流れ。

外に出るのは危ないらしいので今は自宅待機だ。

んで、昔バードウォッチング用に買った双眼鏡を構え、文字通りバードウォッチングをしている。

でっかいニワトリだ。

大きさがはんぱないことと、人間を食べてることを除いたら。

ニワトリのあのカクカクとした動きは割りと可愛いと想像していたけど、撤回だコレ。

2メートル近いニワトリにやられたら軽く恐怖だった。

注意してみると、その太い嘴くちばしで自動車の窓ガラスを貫いている。

そして慌てて出てきた人を、更に一突き　しようとしたところで私が放った高速の弾丸が急所である眼球へと突き刺さる。
ピギヤー！　と悲鳴をあげてよろめくニワトリ。
間一髪で難を逃れたサラリーマンの中年おやじが悲鳴をあげながら逃げていく。

「よしっ」

私は口に含んだいくつかのマーブルチョコを噛み砕き、笑った。

今、私の頭の上で色とりどりのマーブルチョコが円環を描きながら浮いている。
最初は一つずつ宙に浮かせる練習をしてただけど、一つ、二つと増やしていくうちに一箱、二箱になって、今は多分四箱分くらいになっていると思う。ちなみになんでマーブルチョコかというと単にあの綺麗な配色と形が気に入ってるからだ、あと美味しいし。

私は頭上で回るマーブルチョコのうち一つを自分の口内へと誘導した。

うん、やっぱり美味しい。

よもや私の人生で手を全く使わずにマーブルチョコを食べる日がこようとは、いったい誰が想像できようか。

これこそが私の第一の魔法、虹色の円環である！　ちなみに今、命名した。

うん、即決にしてはカッコいいんじゃない？　マーブルってなにか知らないけど。

とにかく、騒ぎが一段落するまではここで高みの人助けを決め込もうと思います。

EP2：現状を確認しよう(前書き)

てきとつだなあ。

EP2：現状を確認しよう

「 総理は今回の報告を受け、警察の手には余るとの判断を下し一刻も早い自衛隊の出動を 」

*

あれから一時間が経過した。

今まで4階のベランダから下を見下ろしながら、ニワトリから逃げる人を助けてただけど、みんなそれぞれ避難したのか見える範囲で確認できるものといったら、穴を穿たれ捨て置かれた車、小火^{ほや}を起こしたのか煙をあげている民家、散乱したガラス……そして、逃げ遅れた人々の死体と、それを貪^{いた}るニワトリ型のバケモノ。どれもこれも思わず目を背けたくなるような光景ばかり、私が数時間前まで住んでいた世界は形を変え、全くの違うものへと変貌していた。

流石の私も結構疲れた。

なにか知らないけど、魔法を使うたびに精神的な何かが削られていくような感じがするのだ。

最初は何も感じなかったんだけど、30分、40分と時間が経つほどそれが顕著に感じられるようになってきた。

私はその削られていく何かを、仮に魔力と呼んでいる。

あえて言うが、これは超能力なんかじゃ断じてない。魔法だ。そっちの方がなんか、ロマンがある。

ところで、情報化社会である今日、家にいながらにして国内だけでなく世界各地の情報を手軽に集めることが出来る。

そして、ここ数時間のニュースは大きく三つに分けることが可能だ。

一つは、知つてのとおりバケモノの襲来。

ただこれはニワトリだけに留まらないらしく、かなり色々な種類がいるらしい。バイオテロによる元来の動物の突然変異という見方が一般的だが、現実味はない。なにせ、世界中で同時に発生してるわけだから。

二つ目は、超能力者まほうじがいが出現したこと。

これもここ数時間でかなりの数が観測されているらしい、ネットでは賛否両論な感じで騒がれてる。つまり否定派の意見として、ヤラセじゃね？ とか、非科学的だ、とか。

何時間か前の私なら同じように否定したかもしれないが、この情報は確実だと思う。ソースは私。

最後、三つ目は奇病の話。

これも、ここ数時間の間に起こっており、そして最もたちが悪い。簡単に説明すると、この病気に罹ると少しづつ身体が弱っていき意識を失う。そしてその後、身体がまるで水晶のように結晶化するらしい。

原因は不明で致死率100パーセントの難病だ。

年齢が10〜20代にはほぼ影響がなく、患者はそれ以外の年齢層がほとんど、という噂もあるけど、確証は無い。と。

「ふう……」

私は開いたいくつかのサイトを閉じ、メモ帳に書いた文章を保存する。

「えと、ファイル名、ファイル名……『プリンが食べたい・txt』
……エンターツ！ よし、できたっ！」

私はノートパソコンを閉じ、立ち上がると現在は閉め切っている
カーテンを少しだけずらし、外の様子を垣間見た。

「いやあ、だいぶひどくなってきたなあ……」

先ほど調べて、バケモノには色々な種類がいると言ったが、その
とおりだ。

実際外をチラリと見ただけで数十の鳥が我が物顔で空を舞っている。
勿論ただの鳥じゃない。なんていうか、プテラノドン級のやつだ。
全身真っ黒な羽毛に包まれているため、おそらくとはカラスだっ
たんだと思う。超怖い。

安易に外へ繰り出して、ぱくりとやられるのは嫌なのでしばらくは
家に引きこもろうと思う。

魔法を使いすぎて身体もダルイ。

「シャワーでも浴びよう……」

正直、この状況でいつまで電気や水が使えるか、分かったものじ
やない。

今のうちに贅沢の限りを尽くしておこう。まあ、たいした贅沢は望
めないんだけど。

*

お風呂のお湯を魔法で動かしたりして遊んでいたら、余計身体が

ダルくなった。

でもおかげで不定形なものを操るのはかなり難しいと言ったことが分かった。今度から魔法の練習は水でしよう。

お風呂からあがった私は、まず、これからの引きこもり生活のために必要不可欠な食料を確認することにした。

とにかくまずは水から。なんとたつて人間、水だけでも何週間かは余裕だとかどっかで聞いたことがある。

私は部屋の片隅に押しやっていた大きく膨らんだゴミ袋を引っ張り出す。それにはごみに出すために大量に溜め込んでいたペットボトルが大小約二十個ほどが入っていた。

さて、今からこれ全部に水を入れていく作業に入る！

「うう、終わったあ」

ひとつひとつはたいしたことは無くてもこれだけの量の水を長時間ペットボトルに入れ続けるのは大変な重労働だった。

私はかじかむ両手をさすりながら満タンになったペットボトルを満足げに見下ろす。

これで、しばらくは大丈夫だろう。

よし、次は、食べ物だ。

私は冷蔵庫を開けた。

が、一人暮らしの冷蔵庫なんてたいしたものが入ってない。数種の野菜と冷凍された肉類、といったところだ。

米も先日ほぼ使い切ってしまったためあと一合あるかないかといったところ。

私は他にもめぼしいものがないかと部屋中を探した。

15分後、他に見つかったのは、インスタントラーメンが3個。以上。

すくなっ！

なにこれ！？　こんな装備で私にどうしろと！？

やばい、私、しばらくは本格的に水だけで生活することになるかもしれない。くそう、もっと非常食とかいっぱい買い込んでくんだっ
た……。

まあ、こればかりは仕方がないとあきらめるしかないか。

私はベッドに倒れこみ、魔法でマールチョコを一粒口内に移動させ、カチカチと音をたてて動く掛け時計の針を眺めながらこれからのことを思索した。

食料も無い、水ももう少しで尽きる、電気も無い。
そんな家にいつまでも引きこもっていてもいずれ餓死するのは明白だ。

それなら、まだ身体が元気なうちに思い切って外に出てみるほうが得策かもしれない。
いや、絶対にそれがいい、うん、そうしよう。

私は、ガバツとベッドから身体を起こし、服の入ったクローゼットを漁った。
戦闘に備えて出来るだけ動きやすい服を選んでいく。

結局、膝丈のハーフパンツとレギンス、黒の長袖インナーの上にポ
ンチヨという服装になった。

今年の冬は冷えるとのことだが、余分な厚着は動きを制限するし、
第一私自身寒さには強いのでこんなものでいいのだ。

それから私はリュックサックに最低限の物資を詰め込んで背負う。
靴も動きやすさを重視したスニーカーだ。

私は玄関に座り込み、靴紐をきつく締め終えると、自分の家の玄関
を6日ぶりに開けはなった。

*

開けた瞬間、血の匂いが冷気に乗って私に押し寄せてきた。
久しぶりの外の匂いは随分と変わっており、私は眉を顰めた。

「早くしないと」

第一の目標は食料の調達、後は現状の詳しい情報が知りたい。

私は無意識にエレベーターへ乗ろうとするが電気が止まっているのを思い出して、階段へと向かった。

出来るだけ足音を立てないように、ゆっくりと階段を下り、遂にマンションの外へと出た。

空を見上げると大きな鳥が獲物を探るように旋回しているため、安易に飛び出したら普通ならその時点ではぐりだろう。

が、そこは私。

忘れていると思うが、私は魔法を使える。

しかも、この5日間それを使いこなす練習を積んできたのだ。大丈夫、いける。

私はポケットからビー球を一つ取り出し、目の前に浮かせ旋回する鳥に向け照準を合わせ、射出した。

初速から、最高速度で発射されたビー球は凶弾となり、悠然と空を飛んでいた巨大な鳥の身体にのめりこんだ。

「ギャアー！？」

と何が起こったのか分からないといった様子で痛みにもがきながらも墜落はせずに、他所よそへと飛び去っていく。

「硬いなあ、やっぱり威力が足りない、弾も使い捨てだし節約しないと」

まあ、その辺の石をぶつけてもいいわけだけど、それは私の趣味に反するため却下だ。

もっともそうならないように弾はそれなりに用意した。

が、少なくとも今の私じゃ、一匹を倒すのにもかなり苦戦を強いら

れそうだ。

私は膨らんだポケットに手を突っ込みながら、歩みを進めた。

食料調達のために立ち寄ったコンビニ数件は、ほとんどが荒らされ、食料という食料がなくなっていた。

人間の仕業か、バケモノの仕業か分からないがこうなったら少し離れたショッピングモールまで行くしかなさそうだ。

ため息をついて、本日5件目のコンビニを発とうと開けっ放しの自動ドアから外に出た。

と、その時、「キヤアーイー!!」と女性の甲高い悲鳴が響き渡たり、その悲鳴の聞こえた方角から、数名の学生と思われる集団が走ってきた。

と、というか私の学校の生徒だった。久しぶりに人間を見た気がする。しかしその顔は皆恐怖に染まっており、私の存在など見えていないようだった。

そして口々に叫ぶ。

「やばいよ！ 早く、早く逃げないと!!」

「嫌だ！ 死にたくないっ!!」

「だ、大丈夫よ！ あの役立たずもこれでやっと役に立ったんじゃない!?」

「しかたがなかったんだ!! 許してくれっ!!」

私は直ぐに理解した。

誰かを囮として使ったことを。

私は逃げる女子生徒の服を掴んで強引に引き寄せた。
そして顔を思いっきり近づけ問いただす。

「どっっ！！」

「ひっ！？ え？ か、会長お！？ なんで……！！！」

女子生徒は自分の学校の生徒会長の姿を見て驚いているようだが、
こちらにそんな暇は無い。

「いいから教えなさい！！ 置いてきた人はどこにいるの！！！！」

私の剣幕に押されたのか、女子生徒は泣きながら答えた。

「あ、あの、曲がり、か、角の向こう、ですっ」

私はそれを聞くと女子生徒を解放し、彼女が指差した方向に向かって全速力で駆けていった。

EP4：戦ってみよう

私の魔法はかなり便利で使い勝手もいいのだが、一つ欠点が存在する。

それは内側にほとんど作用しないこと。

つまりは、自分自身を浮かび上がらせることが非常に困難であることだ。

外側への干渉はそれなりに使いこなせるだけに、何で？ というのが本当のところだが、こればかりは謎である。

*

住宅街を走り抜け、女子生徒が指差した曲がり角を曲がる頃には、私は肩で息をするほどに疲れきっていた。文科系なめるな。

しかし、全力疾走しただけのことはあつたらしい。

一人の女子生徒が、アスファルトの地面にへたり込み一匹のバケモノに追い詰められていた。

幸い大きな怪我は負ってないようだ。

バケモノの方は……やっぱりそうきたか、という感じだった。

茶黒い体毛に鋭く尖った爪、ピンと伸びた耳、涎よだれを滴したたらせ大きな牙を覗かせる口。

犬、とは生ぬるい表現だった。

そのライオンを二周りほども大きくしたようなワンコは女子生徒を堀へいの方へと追い詰め、ゆっくりと距離を縮めている。

私はポケットからビー玉を一つ取り出し、ワンコに向かって思いっきり投擲した。

物理法則に従い放物線運動を描き飛んでいたそれは、途中、第二の

法則により急加速する。

目にも留まらないスピードで、私の放った弾丸はワンコの身体に吸い込まれた。

ワンコが突然の刺激に驚き、巨体のわりに随分と俊敏な動きでその場から飛びのき私の方へと身体を転換し、低いうなり声をあげる。

あれ？　もしかして、全然効いてない？

そう思い私が第二投を撃とうと、ポケットに入った無数のビー玉を一掴みしたところだった。

うなり声をあげながら様子見をしていたワンコが、地を蹴り、私との距離を一気に詰めてきた。

「ちょ！　はや　！」

焦った私は、手に握ったビー玉を地面に落としてしまう。

コロコロとゆるい傾斜を転がっていく無数のビー玉。

「くっ！」

私は手に残った一つのビー玉を、今なお涎を振りまきながら接近してくる躰しんのなっていないワンコに向かって射出した。

ノーモーシヨンかつ高速で飛来するビー玉を初見よで避けるのは難しい。

ビー玉は私の狙い通り、ワンコの額部ひたいに突き刺さった。

しかしワンコは衝撃に一瞬よろめくも、頭を数回左右に振ると、白濁した瞳で私を睨みつけ、警戒するような動きで私から距離をとる。

予想以上に硬い！　多分鳥の数段上だ。

おそらく私の攻撃は毛皮に阻まれて、肉体にはほとんど届いてない

だろう。このままじゃ、何度やってもこいつを倒すのは不可能な気がする。

さて、どうしよう。

私は、残ったビー玉をポケットの中で弄もてあそびながら、ワンコの背後に見える女子生徒を見た。

気を失っているようで、扉にもたれかかり目を閉じている。

「これは、逃げるわけにもいかないか……」

私は残ったビー玉を取り出し、自分の頭上へと誘導、そして半自動的な円環運動をイメージした。

虹色の円環オトマープルと、その場のテンションでちょっとアレな名前をつけたこの魔法は、決してただのかつこつけだけものではない。実際私はここ五日間、部屋にこもって魔法の練習と検証ばかりをやっていたのだ。

この魔法は多少のリスクも背負うが、その分メリットもある。

唯一にして最大のリスクが、常時の魔力消費による疲労度が大きいことだ。

しかし、それを除けばメリットはかなり大きいと言える。

まず最初に、半自動での円環運動をイメージしたことにより、余程のことがない限り武器が自身から離れることがないということ。

更にこれは、いちいち意識を向けなくても最初にイメージしてしまえばあとは勝手に運動してくれるので、戦闘に非常に向いていると言える。

第二に、インターバルゼロでの連射が可能だということ。

集中して一撃一撃を放つのは違い、これは少しだけ意識を向ける

だけで弾が円環運動の軌道を離れ、私の意図した方向へ飛んでいく。そして多少だが威力が上がる。

「さて、さくつと勝負を決めない」と

私がこの状態で戦えるのは、実践だと30分持てばいいほうだと思う。

これからのことを考えると力は温存しておきたい。

私は頭上で回転する無数のビー玉に意識を向けた。

ヒュ、ヒュ、ヒュ、と小さなそして鋭利な音をたて、3つのビー玉が連続で発射される。

しかしワンコの両目を狙った私の攻撃は機敏な動きによって悉く回避された。

内、二つはワンコの胴体部分に命中したが、どうせ大したダメージは無いはず。

そのうちワンコは私が大した脅威ではないと確信したのか、再度私に襲い掛かってきた。

刃物のような牙が私に迫る。

車のような速さで迫り来る巨体に、ちまちまとした攻撃は意味がない。

「ああ、もうっ！ 全部行け！！」

私は迫るワンコに向け、全弾を発射した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4343z/>

目が覚めたら世界が終わってた

2011年12月19日21時45分発行